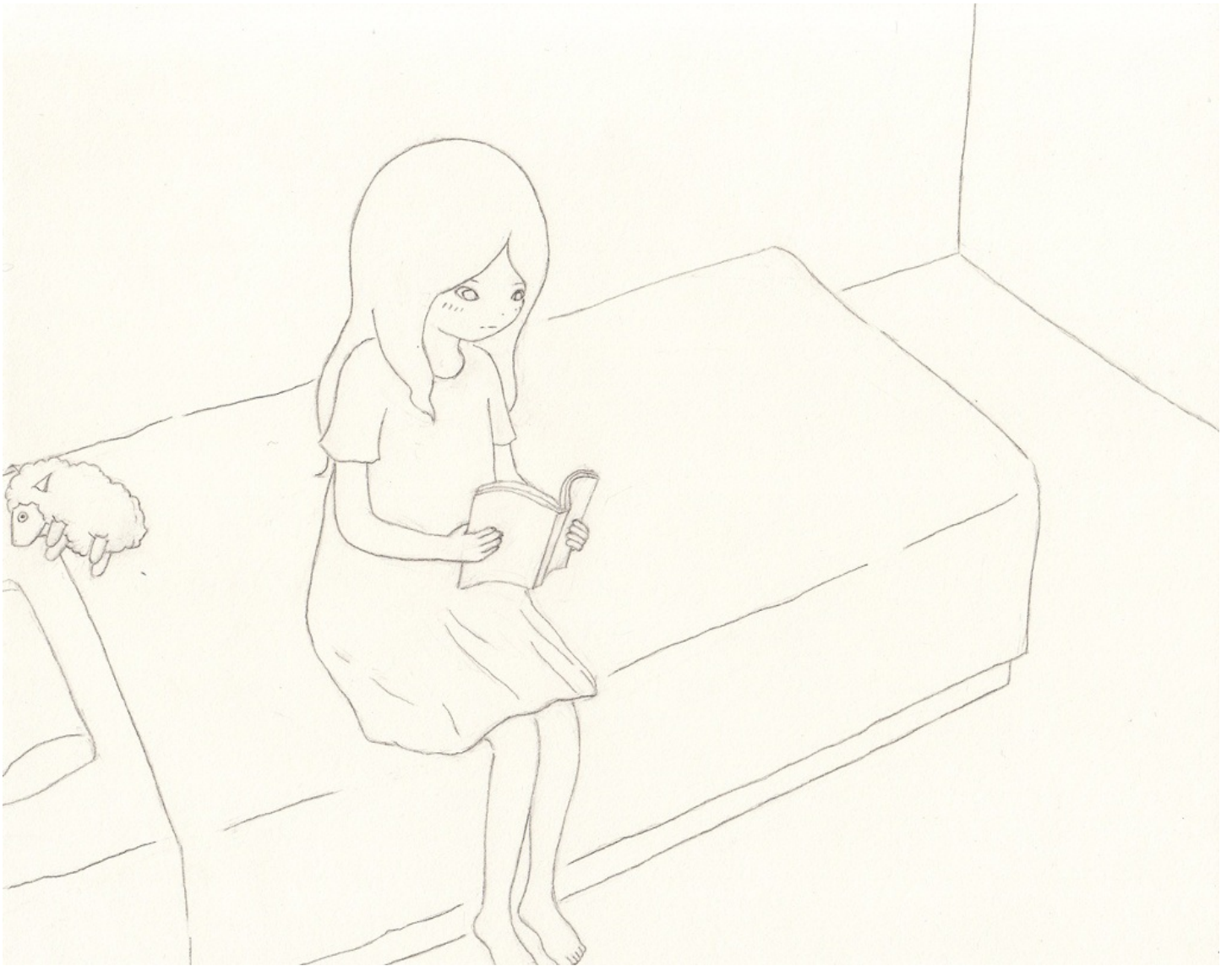


メリーと不思議の街



あるところに、メリーという名の少女がいました。



メリーはいつも一人でいる子供でした。
他の子供たちが外で遊んでいても、メリーは部屋に閉じこもり、一人用のおもちゃで遊んでばかり。
家族以外の人とは、もう何日も口を聞いていませんでした。



ある日、お母さんが、そんなメリーを心配して言葉をかけると、メリーはこう応えました。

「お母さん、みんなが当たり前信じ込んでいる、人の言葉や心なんて、
実は全部嘘っぱちなんじゃないかしら。

だって、人は、きっと心が死んでいても、お面の上では笑うことができるんだもの。

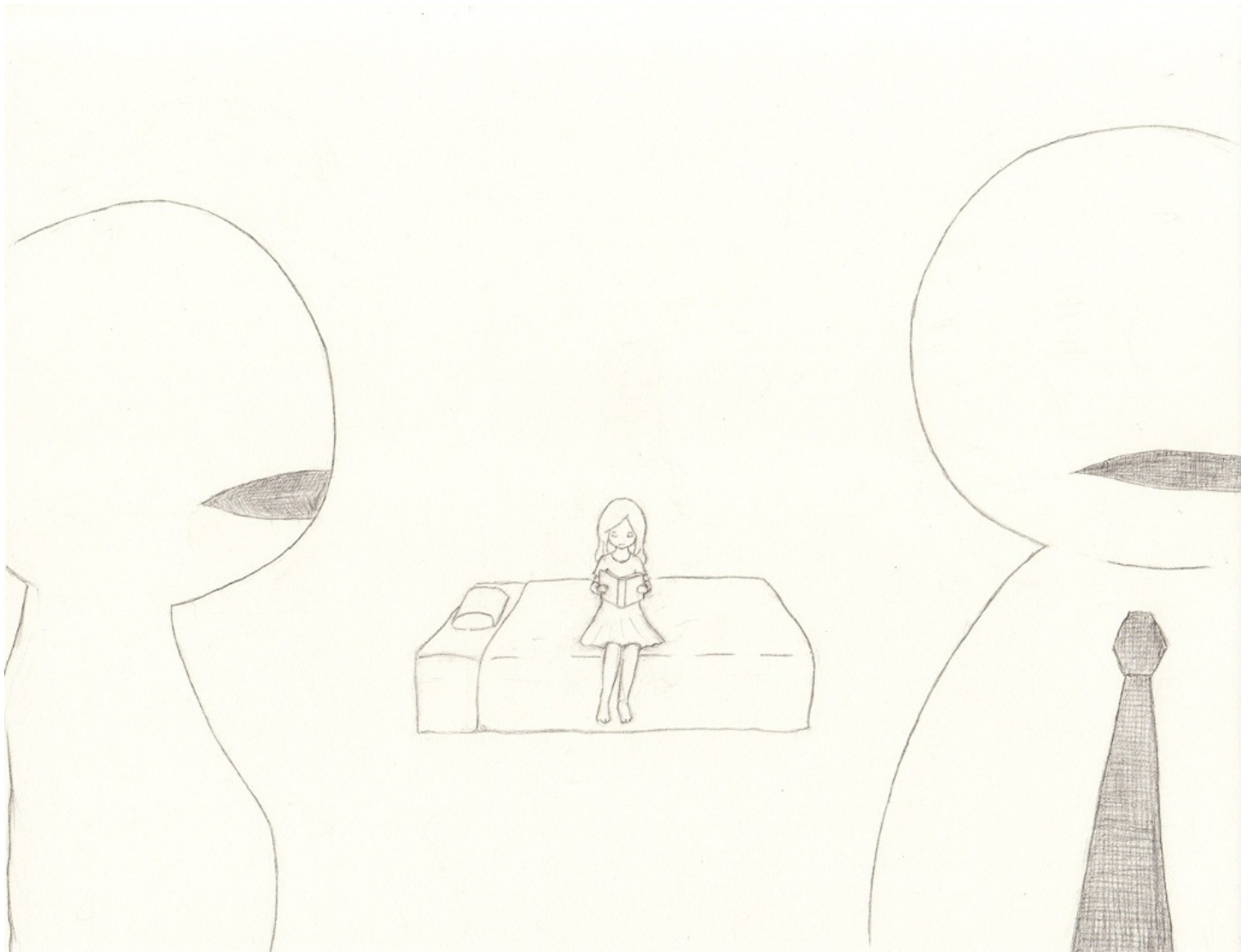
心は目に見えないし、手に取って確かめられもしないから、
その表情や言葉が本当かどうかなんて、わかりっこないのよ」

メリーは、そこで険悪な表情を浮かべると、更にこう言い放ちました。

「わたしはね、そういうあやふやなものが嫌いなもの。

あやふやなことばかりの外の世界も大嫌い。

だから、わたしはずっとここにいるわ。もう、裏切られたくないもの」



メリーがそんなことを言うので、お母さんはますます困ってしまいました。
メリーの言葉に、どう応えてあげたらいいのかわからず、お父さんにも相談してみのですが、
「子供によくある悩みだ。放っておいてあげるのがいいさ」と相手にしてくれません。
そんなわけで、お母さんも次第に言葉をかけるのを諦め、メリーを黙って見守るようになりました。

そうして、メリーは一人で遊び続けました。



しかし、そんな日が長く続くと、メリーは一人で遊ぶことに飽き飽きしてしまいました。

一人で人形で遊んだり、本を読んだり、パズルを解いたりしているうちに、
もしかして遊んでもらっているのはおもちゃの方じゃなく、自分の方なんじゃないかという気がしてきて、
メリーにはそれがちょっと退屈に感じられました。



そこである日、メリーは今までとは違った遊び方をしてみることにしました。

おもちゃや部屋のなかにあるものを使って、自分だけの街を作ることにしたのです。

メリーは早速、適当なものを部屋の一か所に集め、小さな街を作り始めました。

ジグソーパズルの地面に、本を積み重ねて作った家々と、色とりどりのおもちゃの建物の数々。

それはおもちゃの本来の遊び方とは違うものでしたが、その方がメリーにとってはよっぽど楽しいことでした。



メリーはおもちゃの街を作りながら、お気に入りのぬいぐるみ達をあちこちに並べていきました。

特に、人形のテレサは、メリーの一番のお気に入りでした。

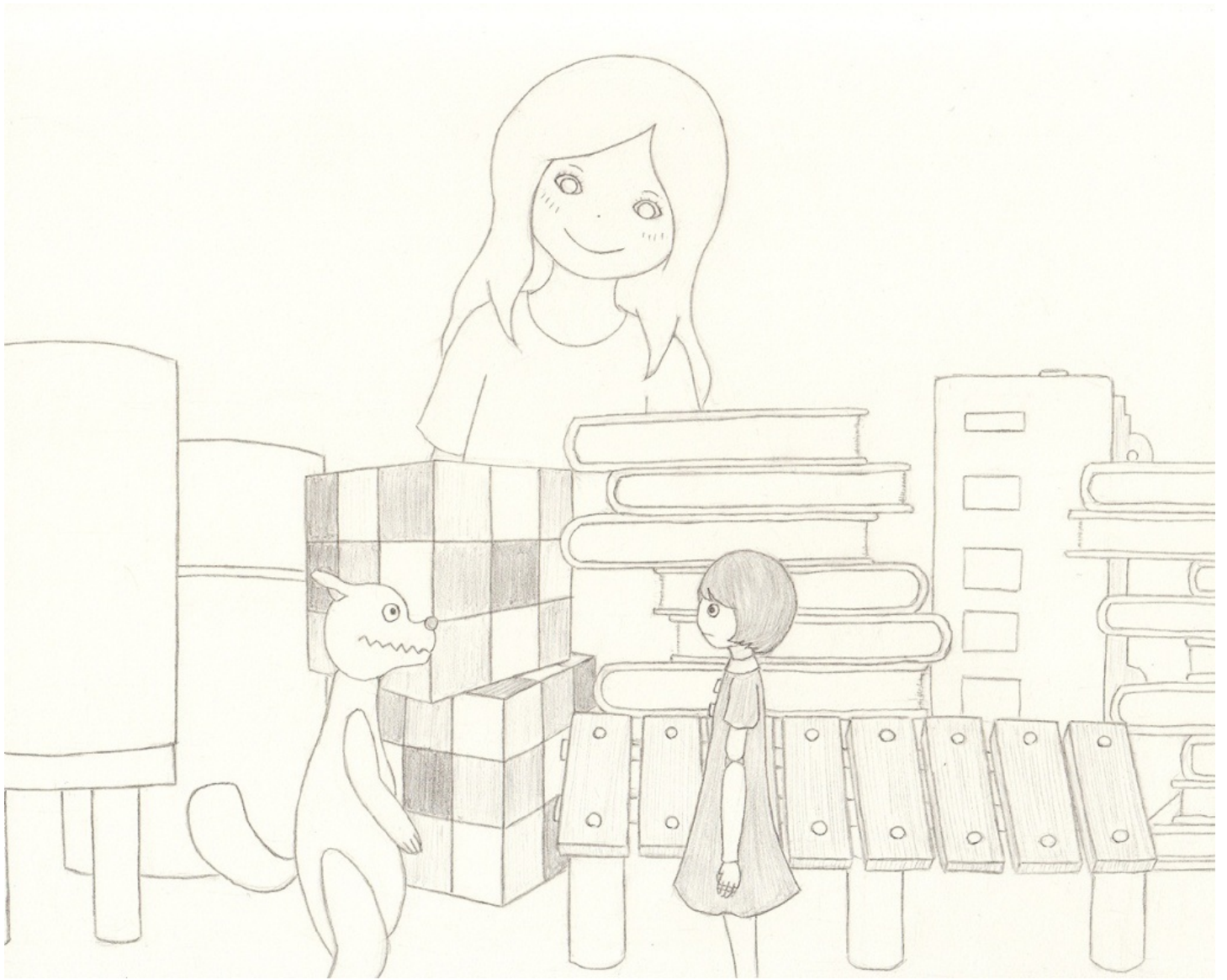
テレサは今さびれて捨てられてしまった、ある遊園地のマスコットキャラクターで、

メリーが昔そこに行った時、お父さんに買ってもらった人形でした。

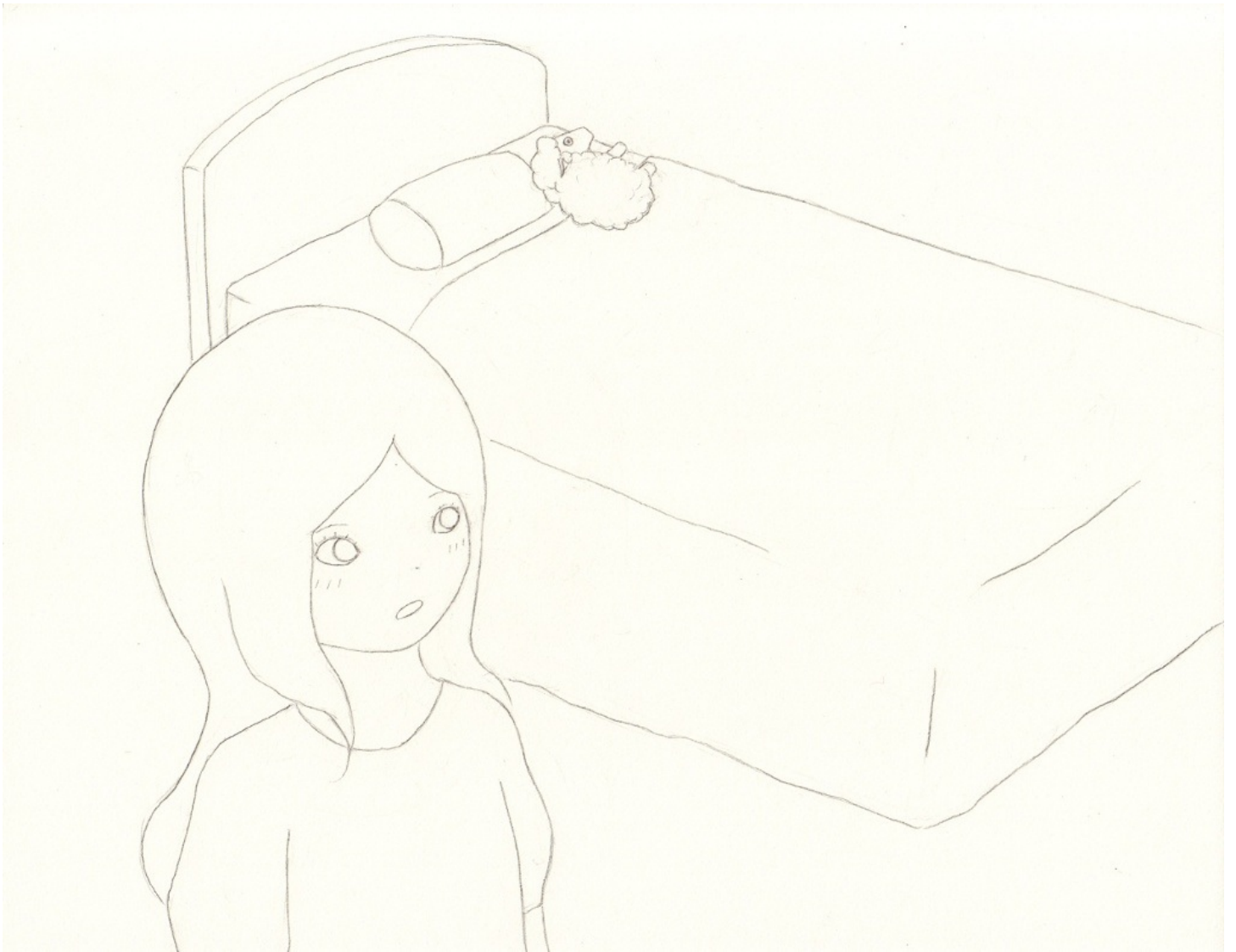
テレサはいつも無愛想な顔をしていて、あまり人気の無いキャラクターだったのですが、

メリーはなぜかそんなテレサのことが好きでした。

メリーはテレサを、どのぬいぐるみ達よりも先に、街の住民にしてみました。



メリーはぬいぐるみ達をある程度並べると、彼らのそこでの暮らしぶりを想像し始めました。
その街は、メリーが住んでいるあやふやなことばかりの世界とは、似ても似つかないところでした。
「この子たちは、この街にいる限り、あやふやなことに悩まされなくて生きられるなんてどうかしら。
誰もがこの世界の何が正しくて、何が正しくないかを知っていて。
相手の心の存在を確かに感じ取ることができて。
住民同士、お互いの全てを理解し合っている、なんて。
そうすれば、誰だっていつも不満や悩みもないし、傷つくものだってないわ。
いつまでも夢の中にいるような気分で、ずっと幸せに生活していくことができるでしょうね」
そんな景色を想像しながら、メリーは夜になるまで街を組み立てていきました。
そして、「もし本当にそうだったなら、わたしもこの街の住民になれたらいいのに」と思うのでした。



夜も更け、そろそろ眠らなければならない頃合いになって、
メリーは、羊のぬいぐるみのロベルトを、おもちゃの街の住民にするのを
すっかり忘れていたことに気が付きました。

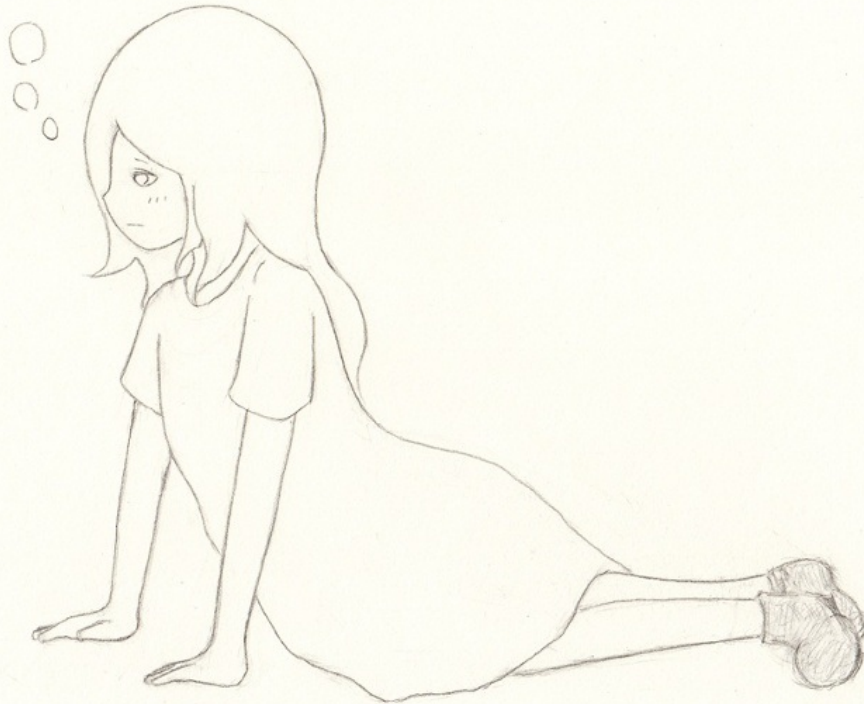
ロベルトは、メリーが両親から一番最初にプレゼントしてもらったぬいぐるみで、
テレサの次に仲良しのぬいぐるみです。

ロベルトはいつもベッドにいて、メリーは寝る前に、一日の出来事をロベルトに話すのが日課でした。
だから、ロベルトは、メリーが楽しかった日のことも、悲しかった日のことも、全部知っています。

メリーはもちろんロベルトも街の住民にしなければいけないと思い、
うとうとしながらもベッドに向かいました。



しかし、そこでメリーの眠気は限界をむかえてしまいました。
メリーはロベルトを手を取ったまま、ベッドの上でぐっすり眠りに落ちてしまったのです。
そんなわけで、結局ロベルトは街の住民になれませんでした。



メリーが次に目を覚ました時、そこは自分の部屋の中ではありませんでした。
知らないうちに、どこかの道端に横たわっていたのです。
メリーは身体を起こし、ねむけまなこをこすりながら、辺りを見渡していました。
「ここはどこかしら？」
「ここはおもちゃの街さ」
メリーの独り言に、どこからともなく答えが返ってきました。
メリーはそれにおどろいて、思わず大きな声をあげました。
「だれ！どこにいるの？」



メリーが辺りを見回しながら尋ねると、いつの間にやら羊頭の背の高い男が
メリーの後ろに立っていました。

「きゃあっ！」

メリーはまたもおどろいて、後ろに倒れそうになってしまいました。

しかし、羊がとっさにメリーの手を掴み、身体を支えました。

「おっと危ない。驚かせてすまないね、メリー。私だよ、ロベルトだ」

「ロベルト？あなたロベルトなの？」

なんと、それは、あの羊のぬいぐるみのロベルトでした。

しかし、メリーが知っているロベルトは、こんなに背が高くなかったはずだし、
こんな立派そうな服を着ていなかったはずだし、何より言葉なんて話せなかったはずなのです。

メリーはそれが不思議で仕方ありませんでした。



「ロベルト、どうしてそんな姿をしているの？」

メリーの問いに、ロベルトは自分の姿を確かめながら答えました。

「どうやらこちらの世界では、私はこのような姿になるみたいだね」

ロベルトのその答えに、メリーはますます混乱してしまいました。

「こちらの世界？さっきも、おもちゃの街って言ってたけど、一体どういうことなの？」

「言葉通りの意味だよ。君は今、君が作ったおもちゃの街にいるのさ。周りをよく見てごらん」



メリーはそう言われて、今度は注意深く、周囲を見回してみました。

すると、さっきは気付かなかったものが、次々とメリーの目にとまりました。

地面には絵画のような模様の道が続き、その上には本を積み重ねたような家が並び、バスや電車がビルのようにあちこちにそびえ、動物の頭をした者や、人形のような姿をした者たちがそこら中を歩き回り、遠くには大きな気球がぼつんと立っていました。

それらはメリーにとって確かに見覚えのあるものばかりでした。

それはメリーが作ったあのおもちゃの街がそっくりそのまま大きくなったみたいに、よく似た形をしていました。

「信じられない……ここ、本当にあの街なのね！」

メリーは街を見回しているうちに嬉しくなって、顔をほころばせて言いました。

「そうさ、ここにある何もかもが、君が作った街を忠実に再現したものなんだよ」

ロベルトがそう言うと、メリーはロベルトの方を向いて尋ねました。

「何もかも？」

「そう、何もかも」

ロベルトがメリーの問いにそう答えると、メリーは目を輝かせていました。

「それじゃあ！……わたしの想像していたことも再現されているのかしら？」

この街のみんなは誰もが何が正しいかを全部わかっていて、誰もがお互いの全てを理解合っていて、みんな仲良く幸せに暮らしているのかしら？」

ロベルトはその問いに、言うまでもないという口調で答えました。

「当然さ。それも含めて君の作った街なのだから」

メリーはそれを聞くと、嬉しくて仕方ありませんでした。

「すごい！わたし幸せよ！」

メリーは、命を吹き込まれて、ありありと歩くぬいぐるみと人形たちを見やりながら、この街を作って本当によかったと思いました。



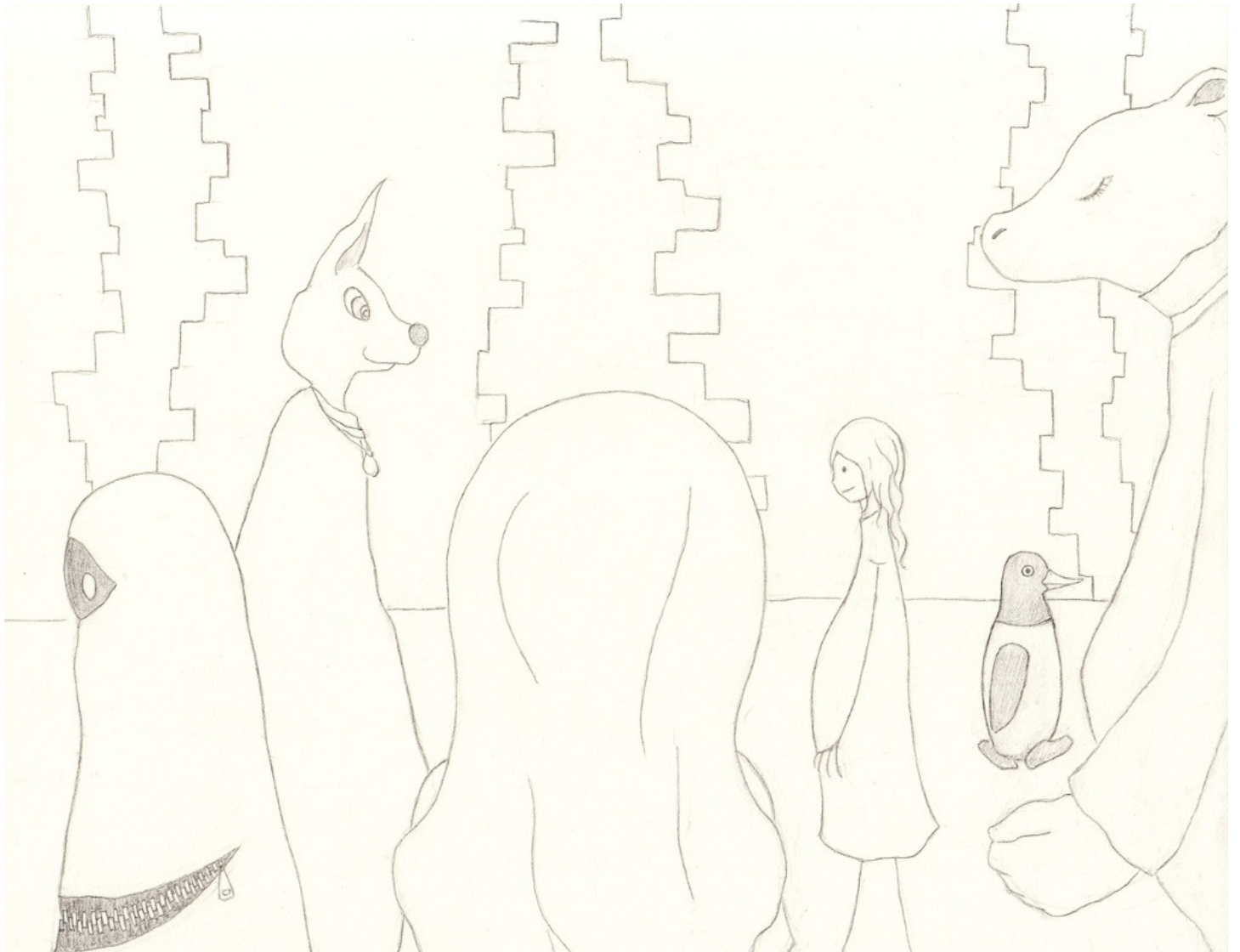
「でも、どうしてわたしはこの街に来れたのかしら？」

メリーはふと疑問に思って、ロベルトに尋ねてみました。

「それは、君がそう願ったからさ。その願いを聞いた街の誰かが、君をここにつれてきたのだろう」

ロベルトがそう答えると、メリーは街を歩き交う人形たちを見ながら、

ロベルトのいう誰かとは誰だろうと想像するのです。



「さあ、話してばかりいてもなんだろう？ちょっとそこらを探検してきたらどうだい？」

ロベルトが提案します。メリーもそれには大賛成で、笑顔でうなずきました。

「ロベルトも一緒に行きましょう！」

メリーはそう言ってロベルトの手を引きますが、ロベルトは少し残念そうな顔で言いました。

「すまない、私はちょっと用があるから失礼するよ。

でも、何かあったら私の名前をお呼び。いつでもかけるけるから。

さあ行っておいで」

ロベルトはそう言って、煙のように姿を消しました。

メリーはつれないなあと思いつつも、すぐにどうでもよくなって、

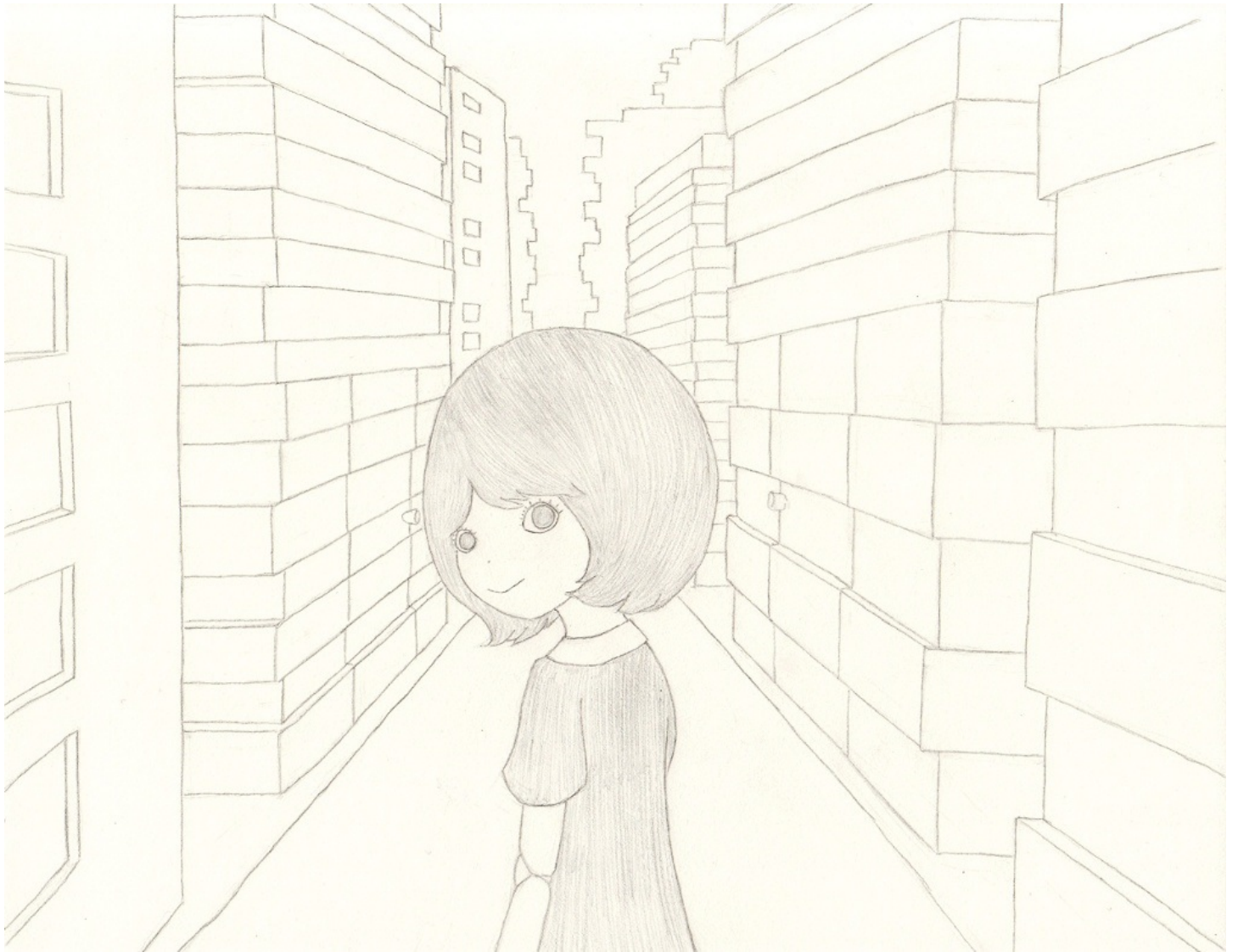
誰かと話そうと街を歩き交う人形たちの方へ駆けていきました。

しかし、メリーはいざ人形たちを目の前にすると、ちょっと尻込みしてしまいました。

いくらくよく知っている人形たちとはいえ、言葉を交わすのはこれが初めてだからです。

そこで、メリーはまず一番仲の良い友達の、人形のテレサに会うことにしました。

彼女となら、上手くやれそうだったからです。



少し歩いたところで、メリーはテレサを見つけました。

「テレサ！」

名前を呼んで手を振ると、テレサもこちらに気がつき、にっこり笑って手をふりました。

テレサは、人形の時のような無愛想な顔を浮かべてはいませんでした。

「わたしのことがわかる？」

メリーがそう問いかけると、テレサはまたにっこり笑って頷きます。

しかし、テレサの方からメリーに話しかけてくることはありません。

メリーはそれを不思議に思って尋ねてみました。

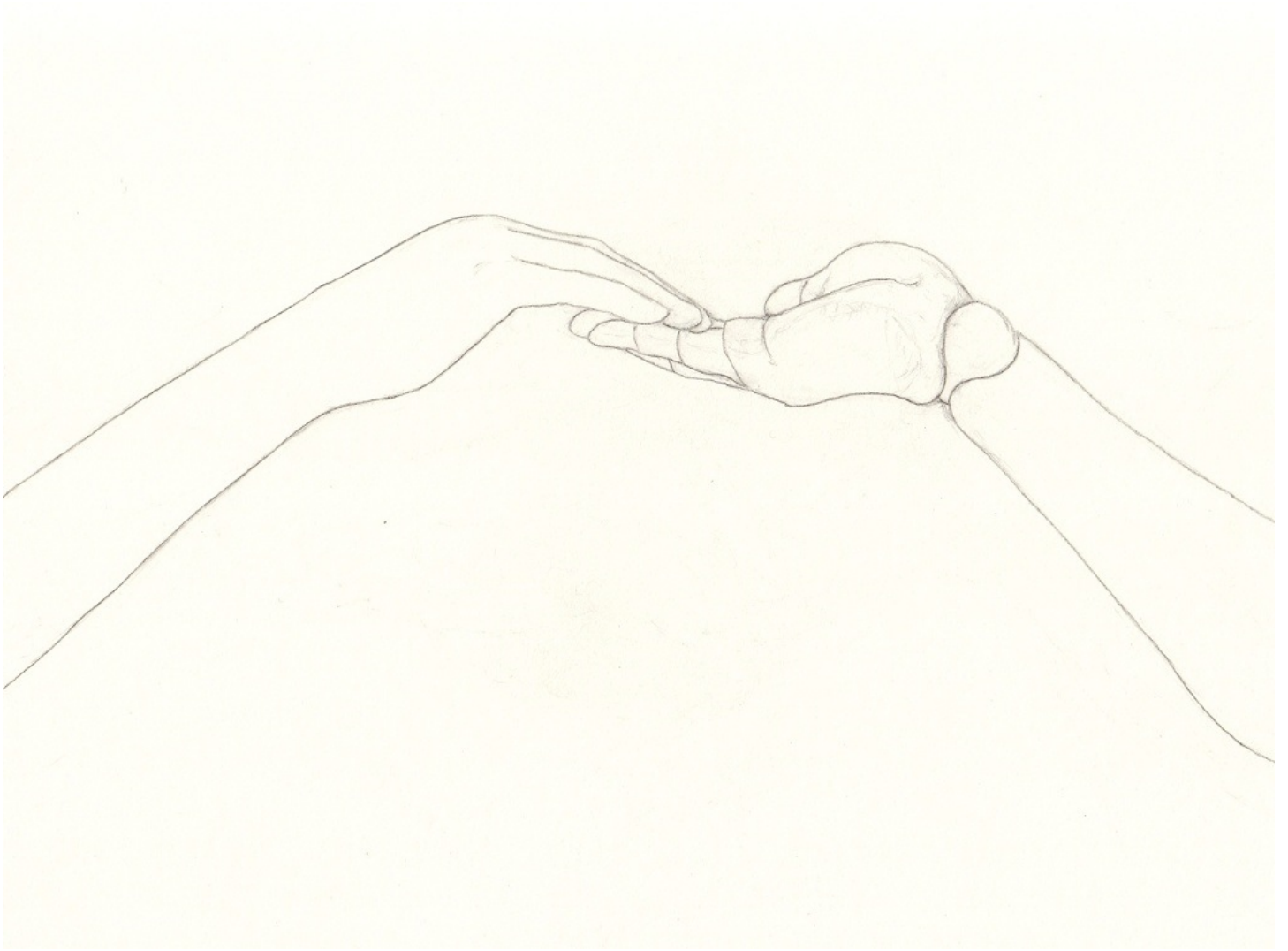
「ねえ、テレサもロベルトを知っているでしょ？あなたも彼みたいに話せるの？」

テレサはそれを聞くと、少し残念そうに首を振りました。

どうやらテレサは、ロベルトとはかつてが違うみたいです。

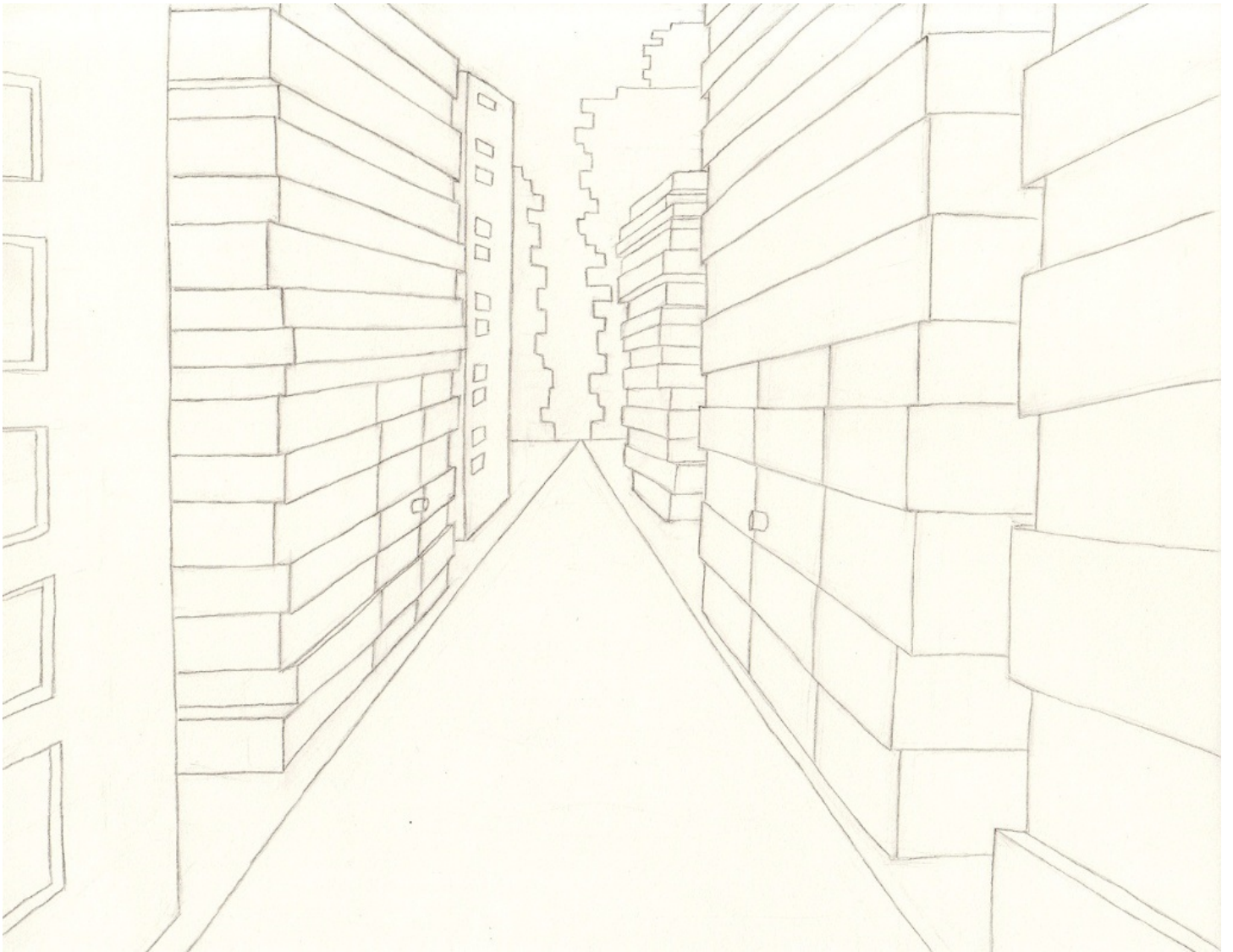


「そう。あなたはロベルトと違うんだ。でもなんだかちょっと安心しちゃった。
だって今までずっと喋らないのが普通だったんだもの。テレサはそのままの方がいいよ。
ここだけの話、最初ロベルトが喋るのを見たとき、ちょっとおっかないなあって思ったんだもの」
テレサはそれを聞くと、くすくすと笑いました。
テレサは人形だった時の無愛想な顔が嘘だったみたいに、よく笑う子になっていました。
メリーはそれを見てなんだか違和感を覚えました、
テレサが楽しそうならそれでいいかと深く考えないことにしました。
「でもね、テレサ。わたしロベルトに聞いたの。
この街は、お互いの全てを理解し合えるところだって。
テレサみたいに話せないなら、わたしたちは一体どうやって理解し合えるのかしら？」
テレサはそれを聞くと、メリーの前に握手をするときに手を差し出しました。



「何かしら？その手を握ればいいの？そうすれば、全て理解できるというの？」
テレサは、その問いに笑って頷きました。しかし、その笑顔はどこか寂しげでした。
「凄いわ！理解し合うのに、言葉がいらんなんて！」
しかし、メリーはその笑顔に気づくことはなく、ただ夢中になって尋ねるだけでした。
「じゃあ、手を触れてもいい？」
その問いに、テレサは先程のように、またにっこり笑って頷きました。
メリーもそれを見て、笑顔になって、2人は手を触れ合いました。

その瞬間、強い光が2人を包み込みました。
その眩しさに耐えかねて、メリーは目をつむってしまいました。
すると――
「さようなら」
何処からか、そんな声が聞こえたような気がしました。



次に少女が目を開けた時、目の前にいたテレサは跡形もなく姿を消していました。

「テレサ？」

名前を呼んでみても、返事はありません。

周りを見回してみても、テレサの姿は何処にもありません。

こんな瞬きをする程の間に、一体何処へ行ってしまったのでしょうか。

少女がわけがわからず、気がつけばロベルトの名を呼んでいました。

「ロベルト！」



「呼んだかい？」

ロベルトは前と同じように何も無いところから、瞬時に少女の前に姿を現しました。しかし、少女には最早それに驚く心の余裕はなく、何でも知っていそうなロベルトに、今起きた不思議な出来事の答えを求めることしかできませんでした。

「たいへんよ！テレサが消えちゃったの！」

少女の戸惑う様子に、ロベルトは落ち着いた様子で尋ねました。

「テレサが？どうしてだい？」

その問いに、少女は相変わらずの慌てた調子で説明します。

「わからないわ！テレサのことを理解しようとして、彼女の手に触れたら、突然光に包まれて、気づいたらここにはわたし一人になっていたの」

それを聞いて、ロベルトは納得した顔で言いました。

「なるほどね。それで、その何が問題なんだい？」

「え？」

ロベルトの問いに、少女はおどろいて一瞬固まってしまいました。

ロベルトはその様子を見て言います。

「何もおかしいことはないさ。それは、紛れもない君自身が望んだことじゃないか。

テレサは消えた、そしてメリーも消えて、新しい君が生まれたんだ。

もうこれで君たちはお互いの全てを理解し合えたんだよ」



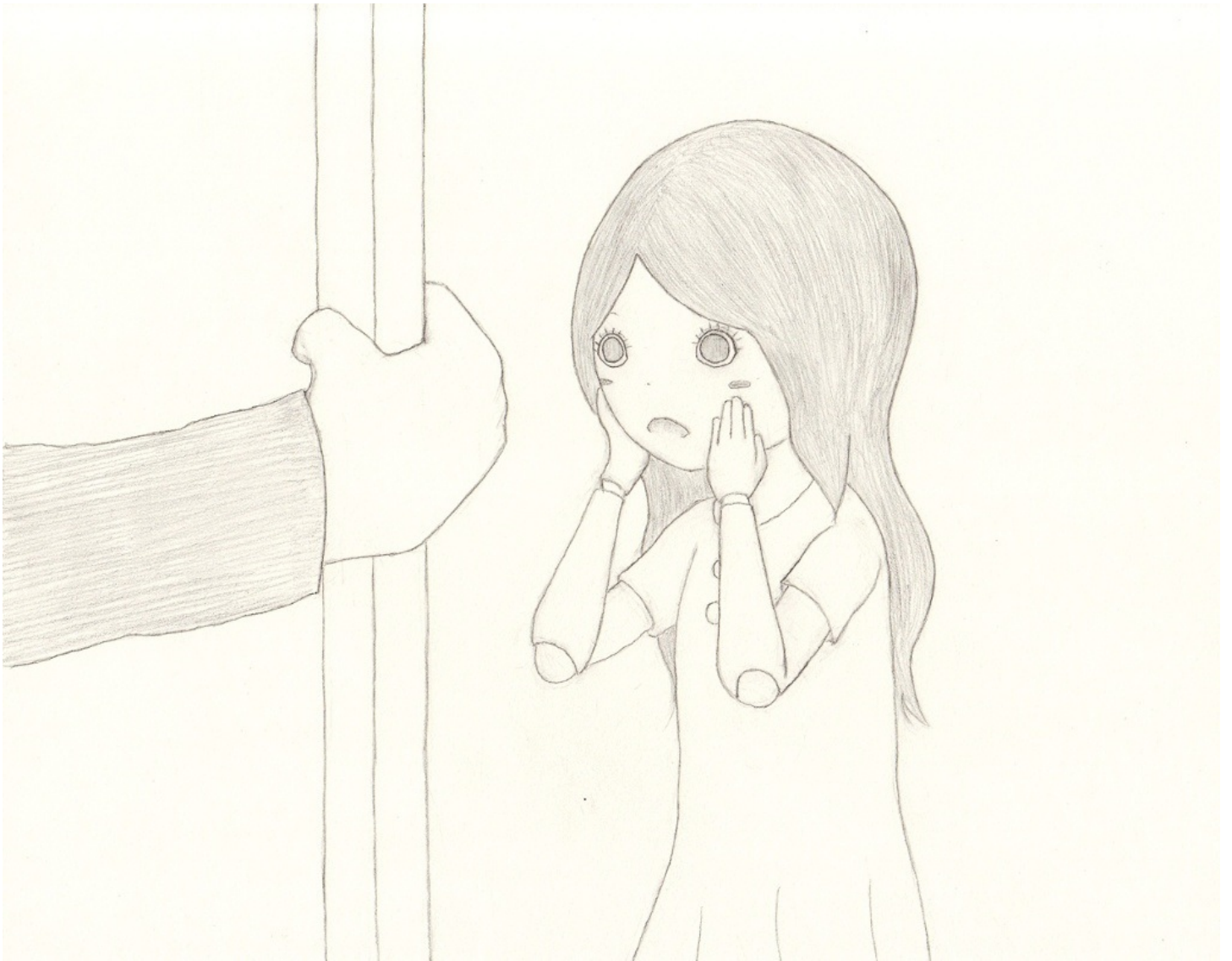
少女には、ロベルトの言葉の意味が理解できるようできませんでした。
耐えがたい葛藤が、自分の意識の与り知らぬところで起こっているようで、
吐き気がするような気分が襲われました。

少女は言いました。

「どうということ？ロベルト。お願い、もっとわかるように説明してよ」

「ふむ、それじゃあ、これならどうだい？」

ロベルトはそう言って、どこからともなく大きな鏡を取り出して、
それをメリーの前に置きました。



「なに、これ……わたし、じゃない……」

少女がそこに見た姿は、以前のメリーのものではありませんでした。
見知らぬ少女が鏡に写っていて、自分がする動きとまったく同じ動きをしているのです。

「よく見てごらん」

ロベルトの言葉に、少女はまじまじと自分の姿を見つめてみました。

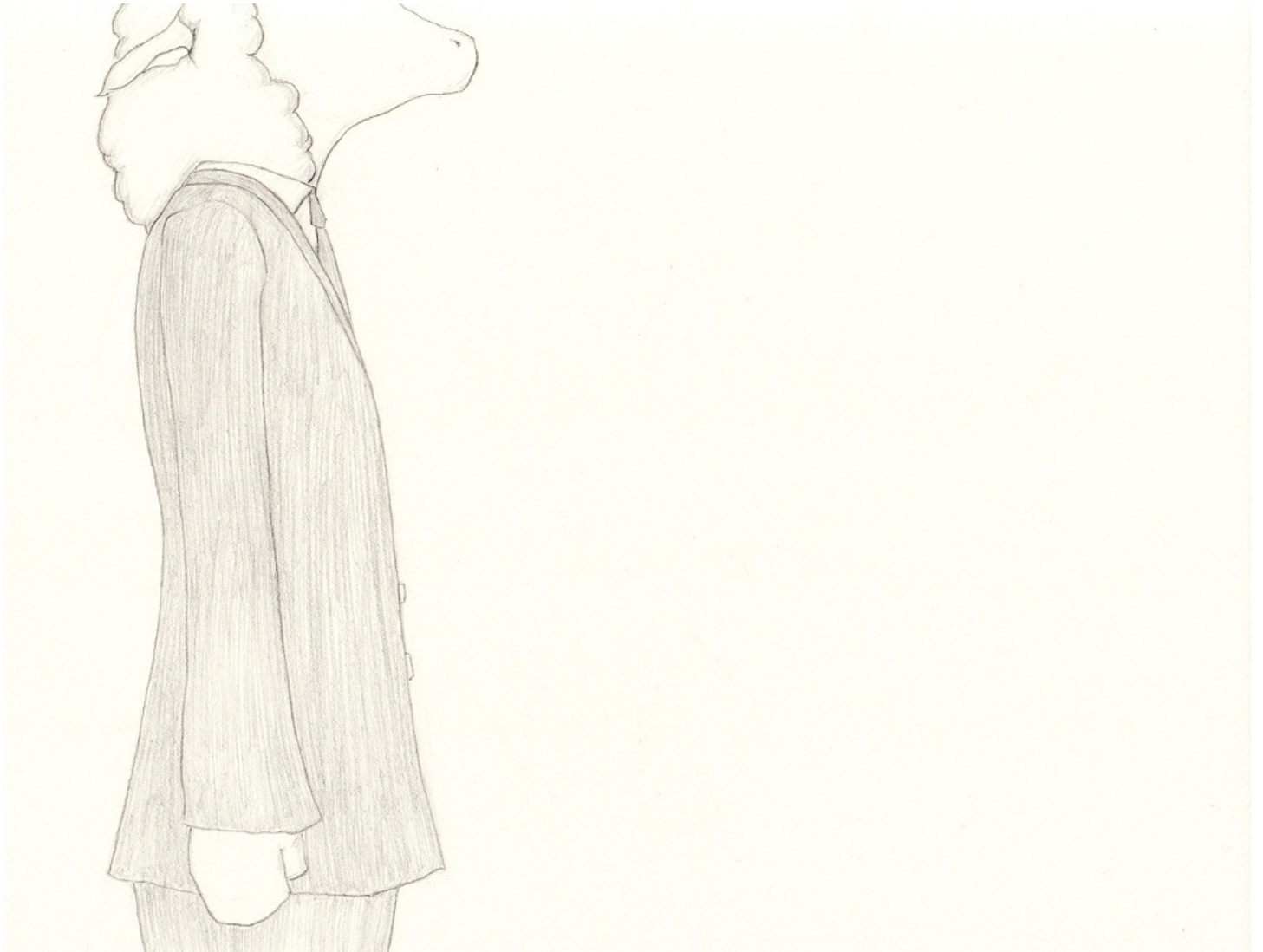
どこか懐かしくもあれば、まったく新しくも見える顔。

黒色の瞳と長髪。

ボタンのついた白のワンピース。

体中につけられた球体関節。

それは、まるでメリーとテレサの姿を混ぜ合わせたような姿でした。



それは少女にとって、たちの悪い冗談のような出来事でした。

少女は動揺して言いました。

「なんなのこれ！これが人と人が全てを理解し合うことだって言うの？馬鹿げてるわ！」

「どうして馬鹿げているんだい？」

ロベルトは少女の息巻いた様子にも動じず、落ち着いて質問をしました。

「だって、これじゃあ、テレサと話すことも、一緒に遊ぶこともできないじゃない。

彼女の顔を見ることさえ、できないじゃない！」

少女がそう答えると、ロベルトは頷いて、言いました。

「そうだよ。それが全てを理解し合うってことなんだ。

2人の間に孤独は無くなり、心は1つになった。君らはもうお互いのことを何もかもわかっている。

人の心を人の行動から読み取るしかないのとは違う。

君はメリーとテレサの中にあつたものを、自分のものとして解釈することができるんだ。

だから、君らはこれ以上言葉を交わさなくていい。

“もうその必要がないんだ。”

そして、心が1つなら、2人の人間がいる必要もない。

だから、何も馬鹿げてはいないのさ。君らはなるべくして1人になったんだよ。



少女はそれを聞いて、愕然としました。少女は恐る恐る自分の心確かめてみました。

その心は、ロベルトの言う通り、もう以前のメリーのものではありませんでした。

確かにメリーだった頃の記憶は残っています。

しかし、その記憶は、もうその見え方が違っているのです。

そこに焦げついていた、空気の残り香が違っているのです。

同じように、メリーの頃には知らなかった、テレサの記憶も残っていました。

しかし、少女はその記憶を初めて知ったにもかかわらず、違和感を覚えることはありませんでした。



それでも少女は納得できません。

少女はロベルトから離れて、街を歩き交う見知ったぬいぐるみや人形たちと会話しようと試みました。

しかし彼らは、テレサと同じように、やはり喋れませんでした。

それならば、と、少女は身振り手振りなどの言葉以外の手段を使おうとしましたが、

それもすぐに諦めました。

テレサの知識が、それをしても無駄であることを伝えていたからです。

少女はほかにも何人かの人形やぬいぐるみたちと会話を試みましたが、結果は全て同じでした。



とうとう少女はうんざりして、それ以上人形たちに話しかけるのをやめてしまいました。
少女はぬいぐるみや人形たちと、さっきのテレサの時のようになるのは嫌だと思いながらも、
人形たちと理解し合えないこともやはり不満でした。

少女はロベルトのところまで戻って言いました。

「ねえ、ロベルト、どうしてあなたとだけはこうやって話すことができ、
さっき私が倒れそうになった時、手を握ったのに、1つにならなかったの？」

その間にロベルトは答えました。

「それは、恐らく私たちがこの街の住民ではないからさ。
君が眠りに落ちたとき、私は君と一緒にベッドにいたからね。
だから私と君との間だけには、ここのルールが通じないんだ」

「そう……」

少女はロベルトの言葉を理解して、諦めたように言いました。

「じゃあ、やっぱり、この街の住民たちと理解し合うには、手を触れ合わせるしかないのね」

「残念ながら」

ロベルトはそう言って、本当に残念そうに首を振りました。



それを聞いて、少女の中に色々な想いがこみ上げてきました。
この街に来る前に思い描いていたこと。この街に来てから起こったこと。
それらが混ざり合って、少女の心は泥水のように濁っていきました。

そして、それに耐えられず、少女はとうとう泣き出してしまいました。
大粒の涙が、少女の頬をつたってぼろぼろと地面へ落ちていきました。



少女がいくら気持ちを静めようと思っても、涙は次々に溢れて止まりません。

そのどうにもならない気持ちが、少女にはわずらわしく思えて、

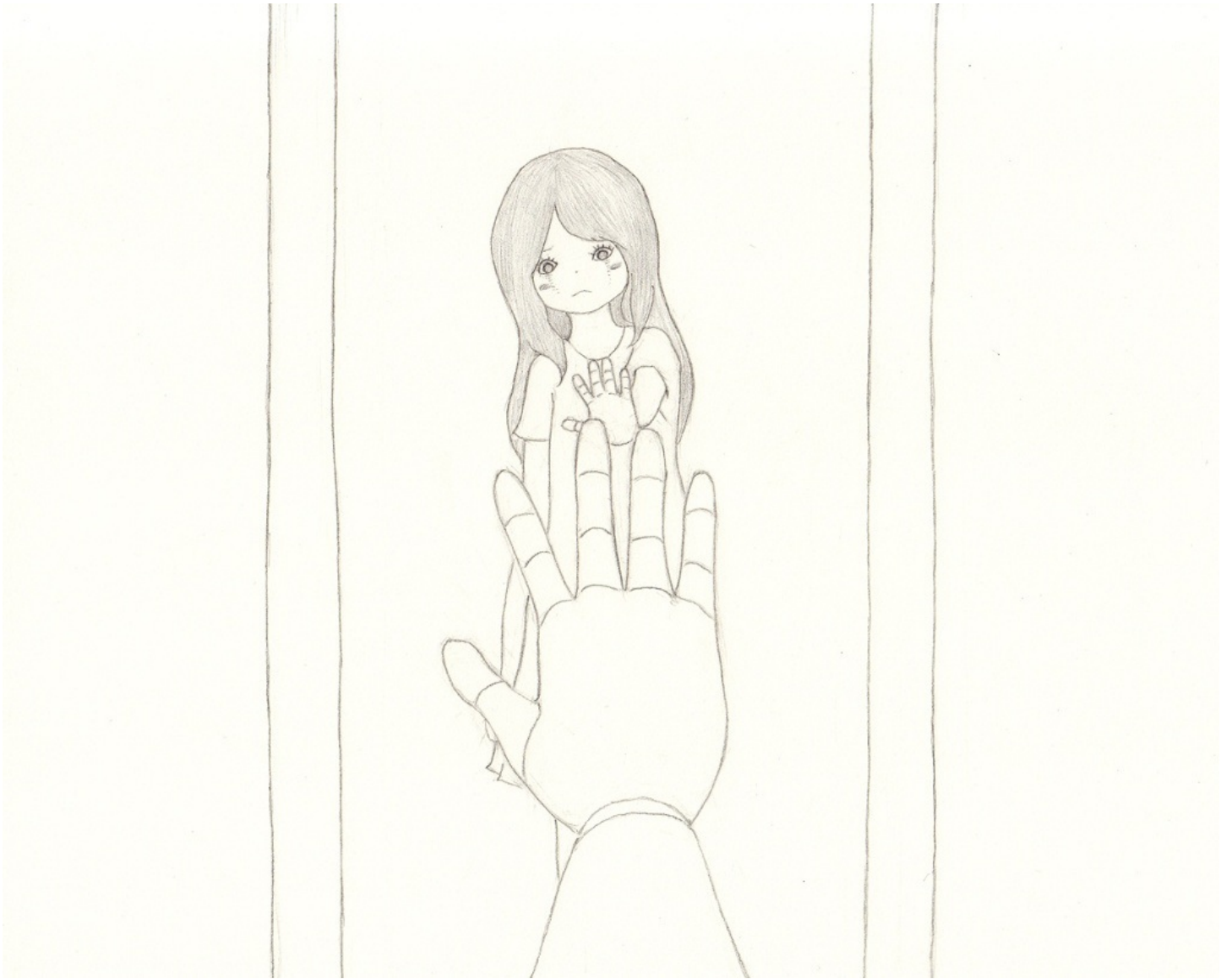
いっそ捨ててしまいたくて仕方ありませんでした。

しかし、いくら振り払おうと思ってもまわりついてくる自分の心に、

少女はいつまでも向き合えないわけにはいきませんでした。

—なんだ、あやふやなのは、何も外の世界だけじゃなかったんだ。

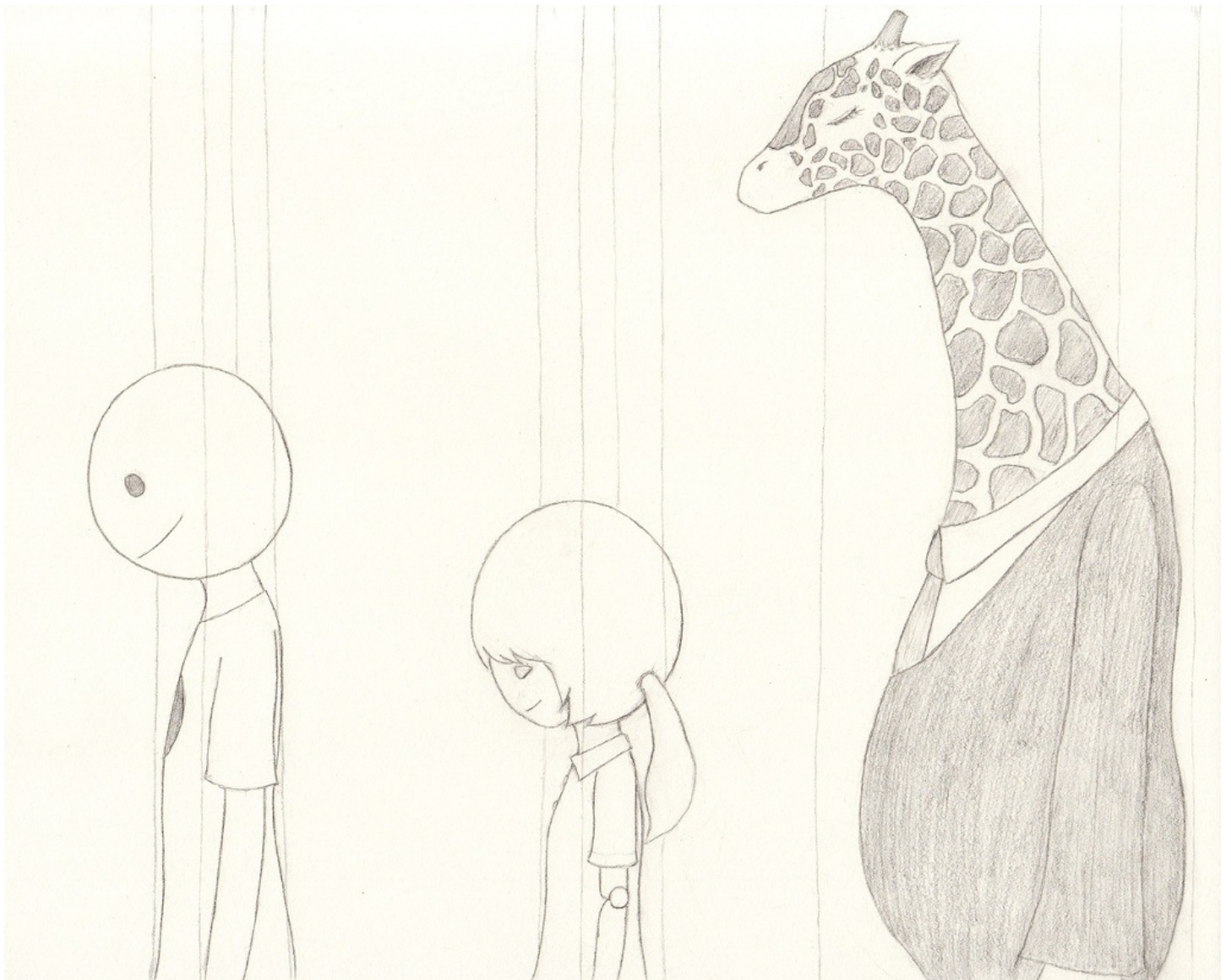
自分の心だって、あやふやでよくわからないものだったんじゃないか……—



そう思うと、少女は自分のことが許せず、嫌いになってしまいそうでした。
そして、少女は、こんなどうしようもない気分を捨てられるのなら、
もうどうなってもいいから、自分の心の全てを理解したいと思いました。
少女は涙をぬぐいながら、先ほどロベルトが出したところに戻ってその前に立ちました。
そして、少女はぼやけた頭で、鏡に映った自分に向かって手を伸ばそうとしました。



しかし、その瞬間、ロベルトが少女の手を掴んでそれを止めました。
「いいのかい？それをしたら君がどうなるのか、わかっているのかい？」
ロベルトの問いに、少女は目を合わさず答えました。
「わからないわ。でも、こうするしかないと思うの」
ロベルトはやれやれといった様子で言います。
「本当にいいのかい？それをしたら、君は本物の人形になってしまうんだよ？」
少女はそれを聞くと流石におどろいたようで、手を引っ込めて怪訝そうに尋ねました。
「人形？一体何がどうなって人形になるっていうの？」
ロベルトはそれを見て少しほっとして、それから言いました。
「もう一度、街を見てごらん」



少女はロベルトにいわれて、再びおもちゃの街を眺めました。

しかし、それは最初に見た時と何も変わらない景色でした。

相変わらず人形やぬいぐるみたちは本物の生き物のようにいきいきと街を歩き回っています。

「何も変わらないように見えるけれど……」

少女の感想にロベルトが言葉を重ねます。

「そうだよ、何も変わらない。けれど、それが問題なんだ。

一見、この街のぬいぐるみ達は、君たち人間のような振る舞いをしているように見えるね。

けれど、実はそれは見せかけなんだ。

君が先ほど私を呼ぶまで、ずっとこの街を調べていてわかったんだけどね、

ぬいぐるみ達は、本当はただ同じところをぐるぐると機械のように動いているだけだったのさ。

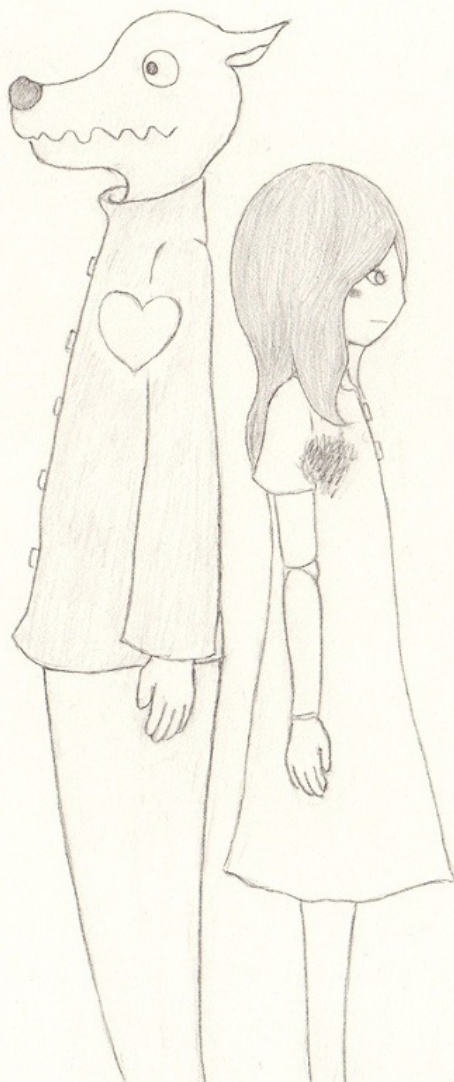
加えて、そこには一寸の狂いも見つけられなかった。どうしてだかわかるかい？

それはね、人形やぬいぐるみたちがみんな、自分の心を全て理解しているからなんだ。

誰もが何が正しくて、何が間違いかを全部わかって動いているから、ぬいぐるみ達には何の悩みもないし、

街はいつだって正しい。けれど、皆全てをわかっているから、誰かと話し合う必要もない。

言葉もいらぬ。感情もいらぬ。表情もいらぬから、みんな幸せそうに笑っていらぬ」



少女は、ロベルトの言うことが信じられずに言いました。
「でも、わたしが話しかけた時は、みんな笑ったりするだけじゃなくて、困った顔もしていたわ」
しかし、ロベルトは首を振っていました。
「それは、君の心があやふやだからなんだ。
人形たちが皆正しくいられるのは、全ての人形たちが同じように
何が正しいかを全てわかっているからなんだ。
言ってしまうと、人形たちは、街という大きな機械を動かす、精巧な歯車みたいなものさ。
だから、人形たちだけでは、その輪の中から永遠に抜け出すことはできない。
けれど、君は彼らとは違う。君は、間違いもすれば、悩みもする人間だ。
だから、彼らは君と話す時だけ、自分の心がわからなくなってしまうのさ」
ロベルトの言葉に、少女はポツリと泣きました。
「わたしが、あやふやだから……」
ロベルトは少女の様子を見やりながら、言葉を続けます。



「そうさ。そのあやふさは、君たち人間にとって、とても大切なものなのだ。
なぜなら君たち人間は、そのあやふやで途方もない暗闇によって生かされているからだ。
君たちは、誰かの気持ちがわからないから、言葉を交わす必要がある。
何が起るかわからないから、必死で悩む必要がある。
何が正しいかわからないから、より一層の正しさを求める必要がある。
そして、なぜ生きているかわからないから、今日も明日も生きていく必要があるんだ。
けれど、それがこの街みたいに、暗闇を失ってしまったらどうだろう？
君まで自分の全てを理解して、この街の人形になってしまったら、どうだろう？
君は、本当にそれでいいのかい？」
「.....」
ロベルトはそうやって、今一度少女に問いかけました。
しかし、少女はその問いに答えられず、その場で黙りこくってしまいました。



しばしの沈黙を経た後、ロベルトはどこからともなく時計を取り出し、それを見やって言いました。

「悩んでいるところすまないが、そろそろ時間だ。行くとしよう」

「どこへ？」

突然のロベルトの言葉に、少女は不安な顔をして尋ねます。

「着けばわかるさ」

ロベルトはそう言って、少女の手を引き、街の何処かに向かって歩いていきました。



少女たちが着いたのは、遠くから見えていた大きな気球のある広場でした。

着いたところで、ロベルトは少女の方を振り向き、仰々しく言いました。

「突然のことで気の毒だが、これから君は選択をしなければいけない」

「選択？」

少女の問いに、ロベルトは言葉を続けます。

「そうだ。選択肢は2つ。この街から出るか、それとも留まるかだ。

君は今からこの気球に乗り、自分の家に帰りたいと願えば、

このおもちゃの街から無事抜け出すことができる。

しかし、逆にこの街に残りたいと願えば、君は今日から晴れてこの街の住民になることができる」

ロベルトがそこまで言ったところで、少女は慌てふためいて言いました。

「ちょっと待ってよ！そんなの急に言われたって……」

「気持ちは察する。しかし、もう時間は残されていないのだ。

あと少し経てば、この街はしばしの眠りにつく。

そうなれば、君は自分の家にも帰れないまま、この街の住民にもなれないまま、

長い長い孤独の夜を過ごすことになるんだよ」

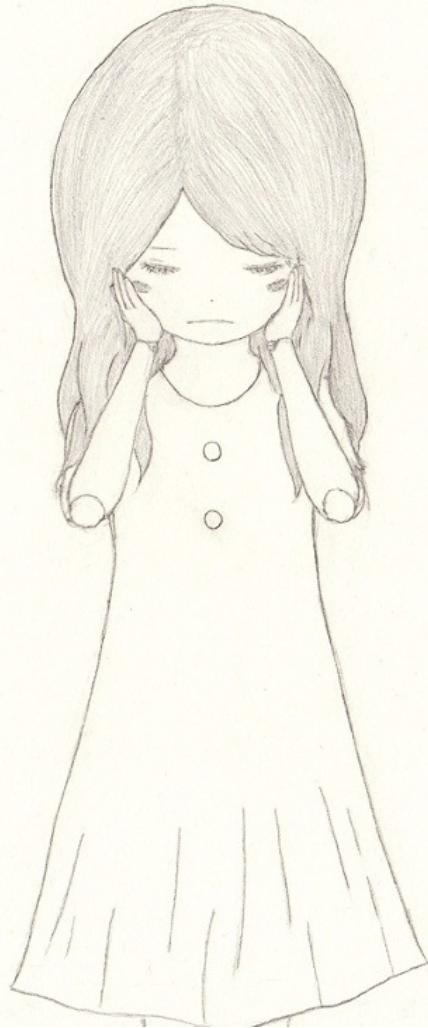
「そんな……」

ロベルトが明かした未来に、少女は言葉を失ってしまいます。

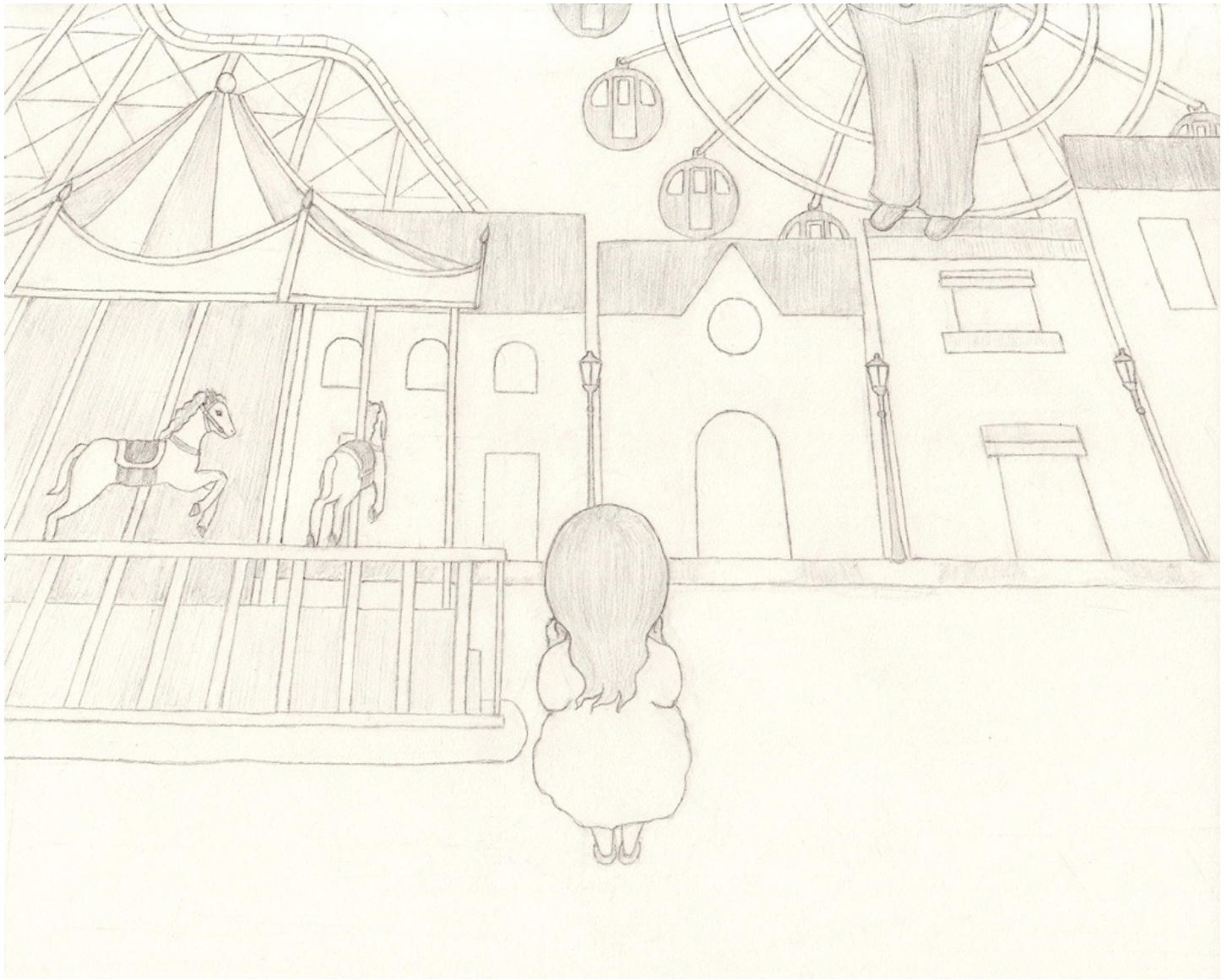
「だから、よく考えて、好きな方を選ぶんだ。

ただし、どちらかの世界を選んだら、もう一方の世界には二度と戻ることができないから、

それだけは気を付けてくれ」



その突然の選択を前にして、少女はその場で頭を抱え込んでしまいました。
少女は先ほどのロベルトの問いへの答えもまだ出せていないまま、
頭の中を泳ぎまわる記憶たちを捕まえては、
自分にとって最も大切なものは何なのかを見つけ出そうとしました。
正しい街。ぬいぐるみ達。ロベルトの言葉。あやふやな自分の心。あやふやな外の世界。
しかし、少女にとって、それらはどれも、美しくも醜くも見えるものでした。
それらを秤に乗せていくら比べてみても、少女が満足のいく答えは一向に出できませんでした。
少女は頭を抱えたまま、その場で身動きがとれなくなってしまいました。



しかし、うつむいて、頭をきりきりさせている内に、ふと少女の目に、
ジグソーパズルの地面が映りました。
それは、メリーとテレサが会った、あの遊園地の景観の一部を映したものでした。
メリーゴーランド。ジェットコースター。観覧車。
そんなものを見ているうちに、少女の中に、テレサだった頃の思い出がよみがえってきました。



その思い出は、メリーと共にいた時のものばかりでした。

メリーとおしゃべりした時のこと

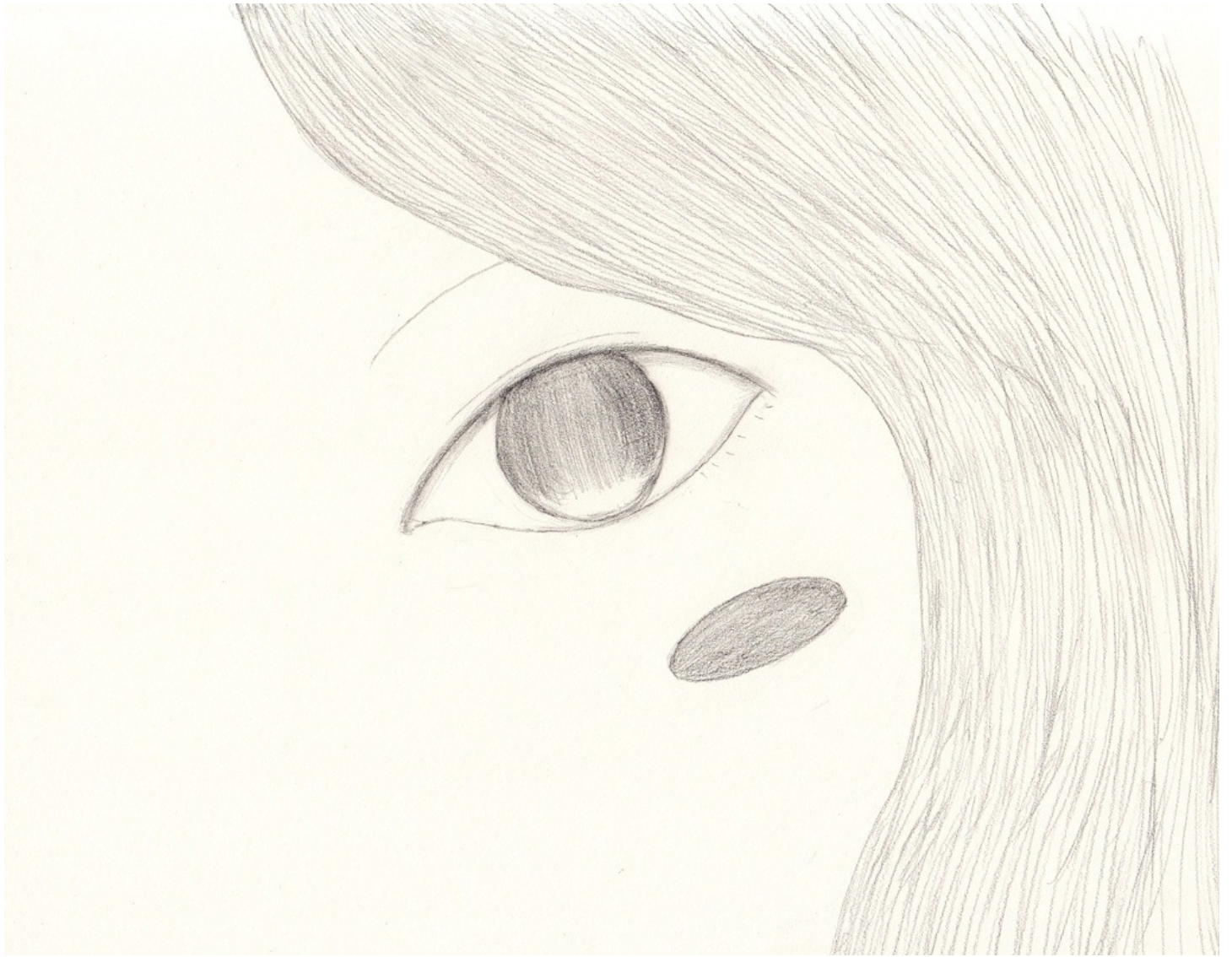
メリーと遊んだ時のこと。

メリーと遠くの街までおでかけした時のこと。

メリーと手を繋ぎ合った時のこと。



その思い出に映るメリーの顔は、どれも屈託のない笑顔を浮かべていました。
その笑顔を見ているうちに、気がつけば少女の顔も微笑み、目からは涙が零れていました。



少女は、少女メリーとテレサの2人だった頃の、忘れていた感情を思い出しました。

すると、先ほどまで霧がかかっていた少女の心は、それが嘘だったかのように
晴れやかなものになりました。

少女は涙を拭いて、ロベルトに言いました。

「決めたわ。わたし、この街から出ることにする」

ロベルトはそう言った少女の瞳を見つめました。

その瞳は、澄みわたり、奥に真っ直ぐな光をたたえていました。

ロベルトは再び問いかけました。

「本当にいいんだね？先ほども言った通り、
一度この街を出たら、もう二度と戻ってくることはできないよ」

ロベルトの問いに、少女はきっぱりと答えました。

「それでもいいわ。わたしはこの街から出ていく。もう決めたことなの」

ロベルトは少女のその言葉を聞くと、頷いて、気球の昇降用の足かけを指さして言いました。

「それじゃあ、ここから気球に乗り、その籠の何処かに手をあてて、帰りたいと念じるんだ。

それで君はこの街から抜け出せる」



少女はロベルトの示した通りに気球に乗りました。
そして籠に手をあてたところで、気球に乗る様子を見せないロベルトに気づいて言いました。

「ロベルトは来ないの？」

少女の問いに、ロベルトは頷き、答えました。

「ああ。私は君とはかつてが違うからね。その気球では帰れないのさ」

その言葉に、少女は不安な表情を浮かべました。

ロベルトはそれに気がつくと、少し微笑んでから言いました。

「なに、心配することはない。帰り道が違うだけさ。すぐにまた会える」

少女はその言葉を聞くとほっとしたのか、頷いて、笑顔をロベルトに向けました。

そして2人は、最後の言葉を交わしました。

「それじゃあ、さようなら、ロベルト」

「さようなら」



少女は目をつむり、自分の家を思い浮かべました。

すると、ガシャン！何か壊れるような音がして、街全体が揺れ動き始めました。

少女は地震が起きたのかと思いましたが、どうやらそうではなく、

それは街のあちこちが動き出したことによるものでした。

地面のジグソーパズルは、上に載っていた建物の重みに耐えきれず、バラバラにちぎれて大きく歪み、

無数の本の家々は、支えを失い崩れ落ちていき、ビルになっていた電車やバスは、

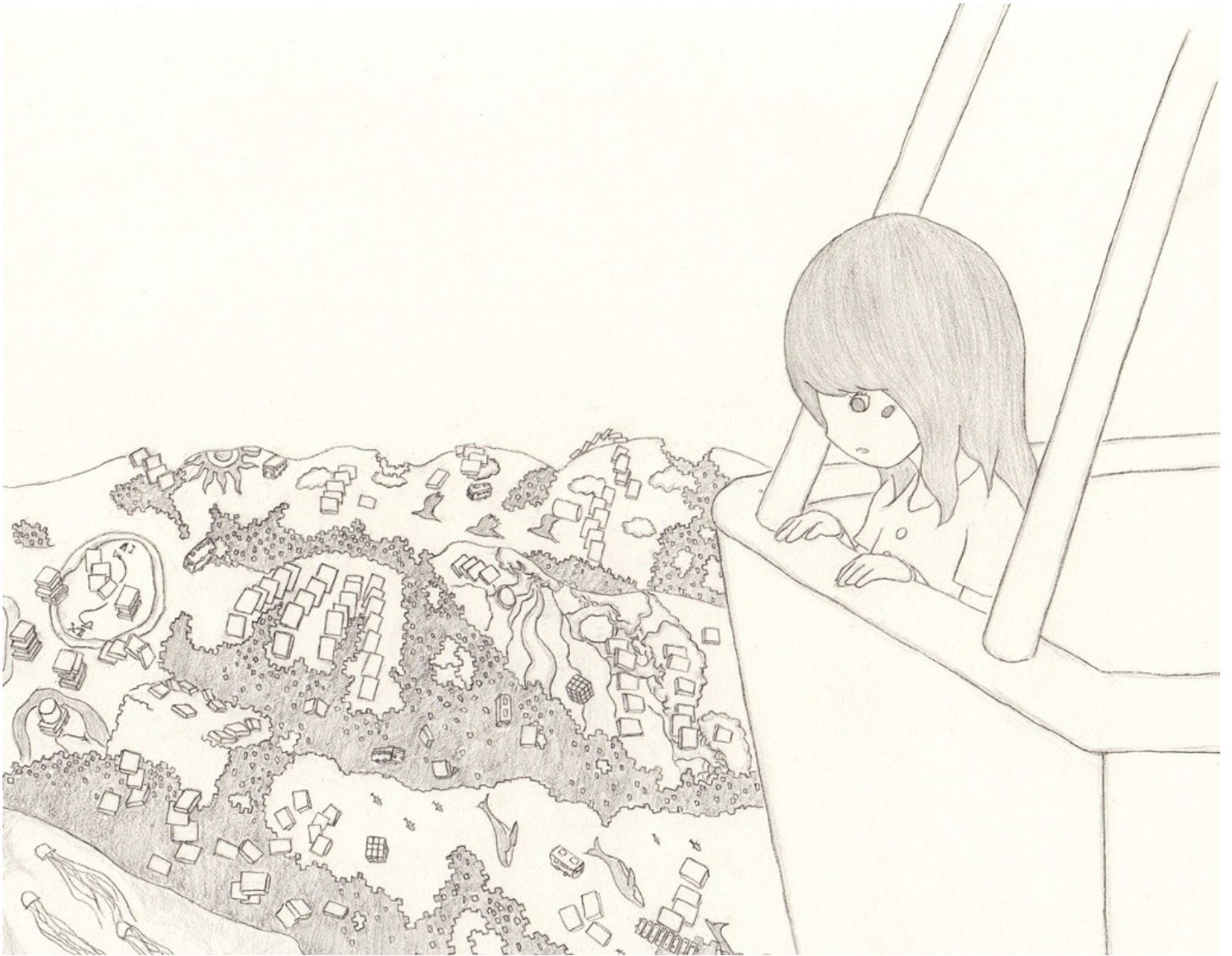
本来の姿を取り戻したように、煙を蒸かして街を走り始めました。

街中、それはもう大混乱でした。

さっきまで機械のように正しく振る舞っていた住民たちの様子も何処へやら、

今は間違いだらけの人間そっくりの慌てようでした。

しかし、街も住民も、その方が自然であるように少女には思えました。



少女を乗せた気球は、街が壊れるのと同時に、空高く、上へ上へと昇っていきました。
気球の上から少女は、ロベルトが見えないほどの高さになるまで、彼と街を見つめていました。

随分と高いところまで昇ってきました。
すると、少女はなんだか急に眠たくなってきました。
そして、少女は気球の籠の中で丸くなると、すぐにぐっすり眠ってしまいました。



次に目を覚ました時、メリーは自分の部屋のベッドの上にはいました。
ロベルトは、メリーがこの部屋で眠りに落ちた時と変わらず、手に握られたままでした。
メリーは仰向けになり、部屋の天井をしばらく見つめました。
少しの間離れていただけなのに、自分の部屋の形や匂いは、
なんだかとても懐かしいように感じられました。
メリーはロベルトを両手で抱き上げ、顔を見て言いました。
「ありがとうね、ロベルト」
しかし、ロベルトはもう返事をしたりしませんでした。

メリーはベッドから起き上がると、まず鏡の前に行き、自分の姿を確認しました。
メリーはちゃんと元の姿に戻っていました。



それからメリーはおもちゃの街を上から眺め、テレサの姿を探しました。
テレサは昨日置いたのと同じ場所で、相変わらずの無愛想な顔で立っていました。
メリーはそんなテレサを拾い上げて、優しく抱きしめました。



その後、何日かして、メリーは随分久しぶりに、外の世界へと出ていきました。
暗闇だらけで不思議に充ちた、あやふやな外の世界へと。

おわり